

長編推理小説
山村美紗

京都嵯峨野の
殺人事件



光文



光文社文庫

長編推理小説

京都嵯峨野殺人事件

著者 山^{やま}村^{むら}美^み紗^さ

昭和63年8月20日 初版1刷発行

発行者 大坪昌夫
印刷 堀内印刷
製本 関川製本

発行所 株式会社光文社
〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13
電話 東京 03(942)2241(代表)
振替 東京 6-115347

© Misa Yamamura 1988

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-334-70783-1 Printed in Japan

光文社文庫

長編推理小説

京都^さ嵯峨^が野^の殺人事件

山村^み美^さ紗



光 文 社

目次

第一章	ある再会	5
第二章	第一の殺人	30
第三章	密室の殺人	65
第四章	容疑者	101
第五章	大覚寺の死体	127
第六章	捜査本部	154
第七章	死の指名	177
第八章	二つの密室のトリック	201
第九章	二組の恋人	227
解説	新保博久 <small>しんぼひろひさ</small>	246

第一章 ある再会

1

中村^{なかむら}亜木子^{あきこ}は、東京駅の新幹線ホームで、友人の杉^{すぎ}歌子^{うたこ}を待っていた。

二人は、大学の同級生で、これから、京都へ旅行するのである。

大学を卒業してから三年たっていて、二人とも、二十五歳のOLである。

亜木子は、腕時計を見た。

列車が発車するまで、あと三十分ある。

丁度十五分前になったとき、歌子がホームをかけてくるのが見えた。

「アキー、待った？」

「いえ。ちょっとだけよ。よかった」

歌子は、相変わらず、派手な恰好をしている。ピンクのワンピースに、大きなサングラス、

アフロヘアーである。

二人は、九時のひかりに乗り込み、隣り合せの席に座った。ひかりは、静かに動き出した。

「ねえ、みんな来るかしら？」

歌子が、はしゃいだ声を出した。

「さあ、きいてないけど、みんな来るんじゃない？ 指定の日に、行かないと、お金も返して貰えないかもしれないし、それに……」

亜木子が、いいよとむと、歌子が、笑いながらいった。

「結婚相手として指名される権利も失うってわけね」

「そう。でも、三年たってるのよ。恋人が出来て結婚した人もいるかもしれないわ」
「減ってるといいのね。三浦みづらくんにきいてみたらよかったわ」

「それは、行ってみてのお楽しみよ。でも……」
「でもどうしたの？」

歌子は、長いつけまつげの眼を亜木子にむけて、楽しそうにきいた。

「でも、あとの三人、本当にこの三年間、三浦くんたちに連絡とってないかしら？ 急に心配になってきたわ」

「大丈夫。大丈夫よ。選ばれなくて、もともとよ。その時は、五百万円を持って、他の人と結

婚するわ」

「えっ、誰か心当たりがあるの？ 結婚する？」

亜木子は、驚いてきいた。

「ないこともないわ。だって、選ばれる確率は、五分の二以下。振られたときに、ショックを小さくするために、無試験入学の男も用意しとかないと。あ、でも、本命は、もちろん、三浦くんよ」

「そう……」

亜木子は、四年前のことを思い出した。

亜木子や歌子たちが、卒業する一年前、ある出来事が起ったのだ。

それは、亜木子たちが、ゼミ旅行をしたとき、担当教授が、一年後に、アメリカの大学に、教授として招かれることを告げたときだった。

「君たちと別れるのは残念だけど、君たちを卒業させたあと、アメリカの大学に行くことになったんだ。行ったら多分五年くらいは、むこうで暮らすことになると思う。東京のマンションや京都の家も処分してね」

学生たちは、驚いて、呆然としていたが、そのとき、三浦みうらかずお一夫という学生が、

「京都のあのお邸もお売りになるんですか？」

と、きいた。

「ああ、今でも、別荘がわりに使っているだけで、ほとんど空家にしてあるからね。あれを売って、アメリカで、家を買いたいと思ってるんだよ」

教授は、おだやかにいった。

その家は、京都の嵯峨^{さか}にあつて、教授に連れられて、亜木子や、歌子も、ゼミ旅行で行った覚えがあつた。

三百坪ほどの土地に、旅館のように、部屋がたくさんあつた。

ゼミの石田教授は、京都の出身だが、二十年も前に東京の大学の教授になり、京都には、盆暮^くぐらいにしか帰っていないということを、亜木子たちも知っていた。

「で、いくらぐらいでお売りになるんですか？ 僕も、京都の出身なので、よかったら、知人にきいてみますから」

三浦がいうと、教授は、

「そうだな。ちゃんと手入れして売れば、土地が広いから、二億以上すると思うんだが、まあ、一億五千万円くらいで、売りに出そうと、家内と話し合つたところだ」

と、いった。

「わかりました。春休みに帰ったら、きいてみます」

「それは、どうも有難う。東京ならとにかく、京都には、今は、知り合いも少ないから、頼む

よ」

その日は、そういって、話は終わったのだが、春休みがすんで、四年生になったとき、三浦と、もう一人の男子学生の桑田登くわたのぼるが、亜木子たち五人の女子学生を集めて、相談したいことがあるといった。

2

「みんなに、ちょっと相談したいことがあるんだ。実は、教授の京都の家のことなんだけど、あれを、僕たちみんなで買わないか？」

三浦が、みんなの顔を見まわした。

「だってエ、一億五千万円もするのよ。どうして、私たちが買えるの？」

といったのは、歌子である。

「私なんか、百万のお金も持ってないわ」

とみどりがいった。亜木子たちも、うなずいた。

「ちょっと待ってくれ。詳しい話をするよ」

三浦が、そういって話をはじめた。

それによると、亜木子たち五人が、ここ一年間で、それぞれ、二百万円ずつ作り、三浦と、

桑田は、五百万円ずつ作るという。

「それでも、二千万円にしかならないわ」

金持ちの娘の千草ちくさがいった。

「それを頭金にして、銀行から、金を借りるんだ。一億円。そして、あの山荘を買い、民宿にして、収益をあげ、少しずつ返して行くんだ。もちろん、土地建物を担保にしてね」

三浦がいうと、女たちは、顔を見合わせた。

「でも、返すの大変だし、銀行も貸してくれるかしら？」

一番頭のいいユミが、考え込んだ。頭の中で、色々計算しているらしい。

「そこで、教授に、一億五千万を一億ぐらいに負けて貰いたいと思うんだ。今は、不景気だし、京都じゃ、億のつく家、それも市内中心部じゃなくて嵯峨あたりだと、なかなか、買い手がつかないと思うんだ。だから、教授に頼んで、なんとか負けて貰えないかきいてみるつもりだ。教授だって、自分のゼミの教え子たちが買い、日本に帰って来たときには、自由に使える、ということにすれば喜んでくれると思う。他人に売って、家を全部、とりこわされたりするよりいいんじゃないかなあ。それに、銀行の方は、桑田の父親が銀行の支店長を知っているし、ゼミの先輩にも、銀行関係へ行っているのは、多いから、なんとか借りられると思うんだ。なしろ担保は、二億ぐらいの値打ちがあるんだから」

三浦は自信満々だった。

「だけど、民宿って、誰がやるの？ 私たち全員でやるわけ」

亜木子は、はじめて口をきいた。

「いや、最初僕と桑田で人をやとってやるつもりだ。そして、三年たったら、君たち五人をよんで二百万円を、四百万円にして返そうと思うんだ」

「つまり倍ね。そんなお金出来るかしら？ 経営に失敗するかもしれないし、たとえば、うまく行っても、借金を返すだけで精一杯で、とても、そんな夢みたいなこと出来ないと思うわ」

ユミが、考え深そうな顔でいった。

「じゃ、今度は僕が話すよ」

桑田が、バトンタッチして、話し出した。

「実は、あの山荘には、横に、百坪あまり竹藪がついてるんだ。春休みに、三浦と一緒に行って登記簿なんか調べて来たんだけど……」

みんなは、桑田の顔をみつめた。

「それを、三浦と二人で、三年間で整地して、宅地として売ろうと思うんだ。分割すれば五千万円には、売れると思う」

「ヤッホー！」

歌子が、声をあげた。

11 「それに、今庭になっているうちの四十坪ほどは、隣りの人が、分けて欲しいといっているか

ら、これは買ったらずぐに売って、二千八百万入る。一億円を銀行から借りて、この二千八百万と、君たちから集めた二千万円を、税金や、改修、人件費、返済の予備金にする。返済は、三年すえ置きで、三年目からになるようにたのんでみる」

「私は、賛成よ」

と、歌子がいった。

「私も、賛成してもいい。でも、お金は、別に、それほど欲しくはないわ。三浦くんや、桑田くんが喜ぶのなら、協力してもいいと思うだけよ」

と、千草がいった。

彼女は、三浦が好きなのである。

他の三人は、黙っている。

千草と違って、三人とも、一年で、二百万という金を作るのは、大変な気がしたし、本当に、四百万になるかどうか心配だったのである。

すると、桑田がいった。

「それから、三浦と相談したんだけど、三年目にみんなに集まってもらったとき、四百万とともにも、我々二人のお嫁さんを、君たち五人の中から、決めたいと思うんだけど、どうだろうか？厚かましいかな？」

すると、意外なことに、一番慎重だと思われたユミが、

「私、この話にのるわ。それが、本当なら」と、いった。

彼女は、どうも桑田を愛しているらしいと噂になっていた。

三浦と桑田は、ゼミの仲間だけでなく、同じ学部の中でも、女子学生の憧れの的だった。

二人とも、長身で、ハンサムで、学業もよく出来、センスのいい男たちだった。

だから、今は、声をかけられた五人とも、二人のどちらかと結婚できたらいいなあと思いつながら、そんなことは、到底、望みがないと、あきらめていたのである。

「本当に、私たち五人の中から選ぶのね？」

ユミが、眼を輝かせて、念を押した。

「誓うよ。書面に書いてもいい。実は、桑田といつも話してたんだけど、こんなことがなくても、我々のお嫁さんは五人の中から選びたいと思ってたんだ。卒業するまでに決めようと思っただけけど、それを三年のぼして、そのあとにしようかと決心したんだよ」

「じゃ、こういう風にしない？」

と、ユミが、提言した。

「三年たったなら、みんな京都に集まって、お金を四百万ずつ貰い、三浦くんと、桑田くんが、五人の女性の中から二人を指名して、結婚する。選ばれた二人は、四百万円のうちから、百五十万ずつ出して、三百万にして、選ばれなかったあとの三人に配る。それまでに、結婚してし

まった女性は、四百万だけ貰う。これでどう？ 私は、多分、選ばれないと思うから、その準備もしとかないとね」

ユミの言葉に、みんなが、笑いながら、了承した。

五人は、一枚の紙に、それぞれ、名前をサインして、印をおし、この約束は、まとまった。

中村亜木子

杉 歌子

三浦一夫

桑田 登

田中ユミ

森 千草

小野田みどり

3

一年間たち、卒業のとき、みんなは、それぞれ、金を調達して、教授から、山荘を、譲り受けることが出来た。

教授は、ゼミの教え子たちが、自分の家を買うことを喜んだ。そして、日本に来たときには、いつも、タダで、泊まることが出来、アメリカから帰ってきたときに、経営がうまくいったら、何らかの形で、プラスアルファを考えると、いう条件を、快くのんだ。

桑田は、仕事は軌道に乗り、生活が安定したら、長年の夢である小説を書いて、作家になりたいといっていたし、三浦は、事業をやりたいといふことだった。

五人の女性の二百万円調達方法は、それぞれ異なっていたが、お互いに、そのことについては、きかないことにした。

亜木子は、入学したときから、毎月、家庭教師を二軒やっていて、三年間その金を貯めていたので、百万円あまりの金を持っていた。それで、それを担保に、銀行で金を借り、OLになってから、五年間で、百万円を返済することにした。月々、利子を入れても、二万少しの返金である。

ユミも、同じ方法のようだった。

千草は、金持ちの娘なので、自分名義の貯金をおろし、みどりは、ファッション喫茶に就いたという噂だった。

彼女は、男性関係が派手だったから、男二人の花嫁になることより、金を増やすことが目的のようだった。

歌子が、どうして金を作ったのかを、亜木子は、知らなかった。